

どこか気になるヨーロッパの都市①
トリエステ（イタリア）

高橋 哲雄

はじめに

これまで「博物館都市」として連載してきたシリーズを今回から模様替えして「どこか気になるヨーロッパの都市」という名で再登場させていただく。

実をいえば、これまで連載で取り上げた都市はすべて複数回訪ねている。かならず検証の旅をおこない、現在の眼で見直してきたからだが、健康上の理由からそれが叶わなくなつた。続けるとすれば「回想のヨーロッパ都市」となるわけだが、それではいかにも大家、碩学風で、今も精神的渾たれ小僧の私には畏れ多い。それに「回想」と後向きになるのも気になる。「もう一度訪ねたいヨーロッパの街」なんてのも浮かんだが、それではアンノン風になってしまう。「比較経済史」や「比較社会史」という確立された分野にたいして、少なくとも

サブ・ジャンルとして「比較都市史」なるものがあってもいいのではという考えから「〈比較〉のなかのヨーロッパ都市」という構想も立ててみたが、それには相当な腎力と準備が必要で、とりあえずは断念した。

「どこか気になる」という通し題にしたのは、その街のどこか気になるかを考えているうちに都市というものの本質理解に通じる水脈を探り当てられるかもしれないと思つたからであり、またそこに生きる人びとの心の秘密、あるいは隠された物語にめぐりあうかもしれないとも思つたからだ。さてどういふことになるか、ゆるりとまいりましょう。

「トランクイット」ということ

トリエステという、このなつかしいような美しい響きの名を持つ都市を知ったのはいつのことだったか。

地図と地名に夢中だった少年の昔であることはたしかだが、しかし、初めて足を踏み入れたのはもう七十歳に近い一九九六年の春、ちょうど須賀敦子の『トリエステの坂道』が出たのと同じ年だった。

須賀の出世作『ミラノの霧の風景』がその数年前に出たとき、「きりめく海のトリエステ」という詩人サーバを中心にした宝玉のような一篇が集中に収められていたことを私はすっかり忘れていて、サーバの経営した書店や、須賀が印象深く描いた「山の道」のことも念頭から離れていた。なによりその旅はナポリにはじまっていったんイタリア半島の南端まで下がり、アドリア海沿いに延々と北上して北東端の国境の街トリエステにいたるといふ大旅行の終わり、それがまたイタリア語でいう「トランクイット」でない（治安のよくない）町づくきとあって、相当気疲れもしていた。

「トランクイット」trancuillo という言葉は英語にもそれに相当する語 tranquillo があるが、英語では「静謐」とか「平穩」といった快い静けさを意味し、「安全」とか「治安の良さ」という意味にはふつう使われない。それがイタリア語ではきわめて即物的に最低限の身の安全を示すことにもなるのは、生活や歴史の違いを反映しているのだろう。イタリア、スペインでは旅のキーワードの一つである。

トリエステでは三泊のつもりだったが、ヴェネツィアを出たところ

で思いつき、ヴェネツィア貴族の避暑地アールゾロに立ち寄って、糸杉の谷を見おろすテラスつきのホテルの典雅な部屋で一泊するという贅沢で息を吹き返した（といってもシーズンオフのここは奇跡のように安かった）。そんなわけでトリエステの予定は二泊に縮まった。

一つにはトリエステも物騒な街ではないかと思っただけからだ。この国境の街を囲む旧ユーゴスラヴィアの内戦は一九九六年当時には前年のデイトン合意で一応の終結はみていたが、難民の吹き溜まりに近い状況があるかもしれないという危惧はあった。その一週間ばかり前訪れたアドリア海の港町バリの人びとの暗い表情も、もしかしたら対岸であるユーゴ紛争の反映であるかも知れぬと思った。バリの旧市街では、歩き出さずすぐ様子がおかしいことに気付いた。人びとの視線に危険なものを感じたのである。避難の意味もあって大聖堂に入ると、二人のおばさんが私のカメラを見て、それはリュックにしまえ、リュックも肩ではなく抱くように前に掛けると言い、事態の深刻さを認識する。私がぶざけてそのうえからコートを羽織ると、それがいい、おまえは頭がいいとはじめて笑顔になった。観光も街歩きを楽しむもあつたものではなかった。

そんなわけでトリエステでは気の休まる場所のゆつくり出来る宿にしたいと思った。

市街図をみると街の中心、といつても一面を海に面した明るく開けたイタリア統一広場がまず目を惹くが、そこに古くからのホテルがある。広場を取り巻くのはすべて堂々たる公的建造物ばかりで、ここな

ら大丈夫と思った。海からの正面には市庁舎が、左側には県庁と、有名なカフェ・スベッキになつてゐる一八世紀の貴族の館が、左側には一九世紀の巨大な海運会社の本社ビルがあつて、その隣のフランス・ルネッサンス風の館がホテルである。明治七年の建築、さだめし古ばけているのではと氣になつたが、ロビーも部屋もけっこう快適で、それに何より部屋からの眺めが期待通りすばらしい。

むかしフランスはナンシー、ヨーロッパ屈指の優雅な美しさを誇るスタニスラス広場に面したホテルで部屋からの眺めに陶然として以來、宿を決めるときは必ず市街図に眼を通してそうしたところがないかを探す。それがなかなか見つからない。ときには北ドイツの小都市ヒルデスハイムの広場ホテルのようなどつともない掘り出し物（ホテルは適当に古くて安く、広場は宝玉）にめぐまれることもあるが、意外に中心広場にはいいホテルはないものだ。

ホテルは安心できるとして街はどうだろうか。食事に出るときコンシエルジュの女性に街は「トランクイット」かを尋ねた。なぜそう訊かれるのかわからないようであつたので、言い直そうとしてふと思いつき、ここには大学はあるかと別の質問にした。ヨーロッパの大都市で大学のあるところならまず夜歩きは安全であることを経験上知つてゐるからだ。しっかり者のお嬢さんは質問の意味を察したようで「治安はわるくありませんよ」と答えたうえで、海外留学生用の大学のパンフレットを渡してくれた。

大学とカフェ

レストランで食事を待つてゐる間に資料に眼を通した。トリエステ大学は公立で意外に規模が大きく、十をこえる（現在では十二）学部があり、中には海洋学部などというのものもある。経済学部は元高等商業学校とあつて、あそこがジョイスのアルバイトの講義先だったかと思ふ。一九〇五年から一五年にかけて滞在したアイルランドの作家ジェイムズ・ジョイスはベルリッツ英語学校で英語を教えるのが本務で、給与もわるくはなかつたのだが、なにさま夫婦揃つての浪費癖で、夜は家庭教師もしなければならなかつた。

現在教授は千人、学生数は二万三千人で市の人口が二十三万ぐらいだから、トリエステの若者人口の相当大きな部分が学生で占められるわけで、これではチンピラやコソ泥の出没の余地はない。月四十二ユーロで市電市バスが乗り放題の学生定期券があるが、実際には発行されず、顔パスなのだという。学生がいかに地域に浸透しているかを示す。彼らはまた若い社会人よりは夜更かしだらうから、夜道も安全なのである。なるほど須賀敦子の文章のどこをみてもずさんだトリエステが出てこないわけだと思ふ。

しかし、ここは位置の上からも国境の町、多くの人びとの同居、流入する町であることにまちがいはない。

眼の前のイタリア統一広場を見よう。ここはヴェネツィアのサン・マルコ広場に似ている。海に面してゐるうえに主要な行政機関（歴史的なものを含む）が集中しているからだが、重要な違いは教会がない

ことだ。そこが、ヴェネツィアだけでなく、ほかのイタリア都市とちがう。ドイツ、オーストリアによくあるタイプなのだ。

それはこの街の歴史から来ている。ここは長いことイタリアではなく、オーストリア領であった。ハプスブルク帝国の唯一の重要な海港であり、海への玄関であった。ホテルの海側の隣の建物はかつてのオーストリア・ロイドという船会社の本社ビルであった。また海軍の基地でもあって、必要な石炭を内陸部の炭坑から持ってくるためにオーストリア＝ハンガリー帝国初の幹線鉄道であるウィーン＝トリエステ間の鉄道が一八五七年に開通していた。ハプスブルク家の支配は一九一八年に帝国が解体されるまで足かけ七世紀に及ぶ。住民はイタリア人が多いが、公用語はドイツ語だった。しかし、この街にはある程度の自治権が与えられていて、一七一九年には自由貿易港となり、帝国の力の伸長を反映して一九世紀半ばにはジェノヴァやバルセロナさえもしいで、マルセーユに次ぐ地中海世界第二の港となる。帝国内でもウィーンとプラハに次ぐ第三の都市にのし上がった。

この街の主な建築物がウィーンの建築家の手になり、当然の結果としてウィーン風の街並みが形成され、中心広場がイタリア風の教会中心でなく、役所や商工会議所など世俗ブルジョワ支配を反映したものになっていることなどは、そうしたハプスブルク帝国下の自由港としての繁栄を物語る。

それはまたもう一つのこの街のうれしい特徴をつくった。

カフェ、とくにウィーン風のグラン・カフェが街のあちこちに生ま

れたことである。ホテルの広場を隔てた向いにあるカフェ・スペッキ（一八三九年創業）をはじめいくつもの、今ではカフェ・ストリコ（歴史的カフェ）と呼ばれる名カフェが街のあちこちに散らばっている。私は尾道や小樽、盛岡といたたい喫茶店の多い街が好きなのだ。が、なかでも坂の町であり港町でもある尾道、小樽では幸せを感じる。わが町神戸も中心街はパツとしないが、岡本界限は一九六〇年代にはいくつかの落ち着ける店のほか、音楽喫茶が二つ、明治の香りを連想させる「ミルクホール」さえも残っていて、初めて入ったときは官報が置いてあるのだろうかとかキョロキョロしたものである。

トリエステはまさにそんなふうであった。時代がかった店ではスタンダーがトルコ人商人にパンチを振舞ったという逸話のあるカフェ・トマーゼオ（一八三〇年創業）やジェイムズ・ジョイスが一九〇五―一五年の滞在中よく通ったカフェ・ピローナ、やはりジョイスや彼と親交のあった地元作家ズヴェーヴォ、詩人サーバ、さらにはこの地で「ドウィーノの悲歌」を書いた詩人のリルケといった顔ぶれが常連であったカフェ・サン・マルコ（一九一四年創業）などが知られる。サン・マルコは第一次大戦の開戦のとき、国籍上オーストリア軍に属していたイタリア兵でイタリア軍に加わりたい者に偽パスポートを発行した場として有名になった。

トリエステとユダヤ人

こうした人びとの名が示すように二〇世紀初頭のトリエステは芸術家の集まる国際都市であった。ジョイスがアイルランドを離れてトリエステに移り住んだのはまったく偶然のことであったが、来てみると彼も妻のノーラもこの風光明媚でコスモポリタンな、緑の多い丘と海に開けた噴水の広場を持ち、「大運河」という名の風情ある船溜まりや、歌好きの夫婦にうれしいことには歌劇場まであるこの街がだんだん好きになった。アイルランドから弟を呼び寄せ、妹たちも呼び寄せた。稼がせて貢がせようという魂胆からはあつたが。

多言語、多民族の町で、多数を占めるイタリア人（一九一三年に七五％）のほかスロヴェニア人（一九％）、ドイツ人（五％）、ギリシヤ人、ユダヤ人が混じっていた。なかでもジョイス一家がもつとも関わりが深かつたのはユダヤ人（四％以上）の数字と重なるのである。

ユダヤ人はヨーロッパのなかではイタリアとは比較的縁が薄い。ロシア、東欧、スペインといったところにユダヤ人はかたまつて住み、イタリアでは大きなほうの部類のヴェネツィアのゲットーでもそれほど規模を感じさせない。そのなかでトリエステは街の規模からすればユダヤ人が多かつた。それは位置関係がもたらした結果で、ここは「トリエステーサンクト・ペテルブルク線」という名が示すように東西ヨーロッパを分かつ境界線の端に位置し、同時に南北ヨーロッパを分ける境界の結節点の一つであり、東欧と南欧を最短で結ぶ交通路の出口であつた。二〇世紀初めにはロシア革命を避けて流出したユダヤ

人がまず身を寄せたのがトリエステであつたが、それまでも彼らはこの地にけつこう根を下ろしていたのである。アイルランド人におけるリヴァプールのようなところであつた。

ジョイスがここで初めて触れ合つたユダヤ人は妻ノーラが妊娠して家主から追い出されたとき、それを承知でよるこんで部屋を提供してくれた親切な女家主であつた。彼女はいかにもユダヤ人らしく教育に敬意を抱いていて、ベルリッツのような有名学校の教師に部屋を貸す

写真掲載不許可

トリエステ

のを嬉しく思っていた。出産のときにも献身的に世話をしてくれた。

ジョイスの教え子にもユダヤ人は多かった。恋愛詩『ジヤコモ・ジョイス』の対象になったアマリア・ポッパーはロシアでの迫害を遁れてきたユダヤ商人の娘だった。アニー・シュライマーはオーストリアの銀行家の娘で、ジョイスに想いを寄せたが、父の反対であきらめ生涯独身で通した。音楽好きで内気なアニーとは対照的にアマリアは気位が高くジョイスを使用人扱いし、彼をいらつかせた。総じてユダヤ人の商人社交界は気位が高く、ジョイスは洗練された鋭い機知で彼らを魅了し、ファンを作ったものの、他方ではただの語学教師でしかないことを思い知らされたという。

彼と親しく、相互につよい影響を受けたハンガリー系ユダヤ人の富豪エツトレ・シュミッツ（作家のイタロ・ズヴェーヴォ）でさえそうであった——と、妻ノーラの伝記を書いたブレンダ・マドックスはいう（『ノーラ』丹治愛監訳）。シュミッツ夫妻はジョイスを豪邸によく語り合い、また金銭的に助けるためにジョイスの妹を娘の家庭教師にやとつたり、妻ノーラをアイロンかけに使つたりはしたが、社会的に対等の友人として遇することはなかった。とくにシュミッツの美しい妻リヴィアは街路でノーラと会つても気づかぬ振りをしたというのである。これは二人の親交を主張する通説的理解とはちがうようである（『ファーグノリ&ギレスピ』『ジェイムズ・ジョイス事典』）。私は判断を下すだけの知見を持ち合わせていないけれど、これはジョイスが反ユダヤ主義者であつたかという論争にかかわる微妙なポイントなのであ

る。ともかくはつきりしているのは『ユリシーズ』に登場するユダヤ人の習慣や伝統はシュミッツから仕入れたものが多く、また『フィネガンズ・ウェイク』の主人公の妻のモデルには、ノーラとともにリヴィアも使われたといわれる。

この二〇世紀を代表する作家の二つの重要な作品——『ダブリンの市民』と『若い芸術家の肖像』がともにトリエステでほとんどが書かれ、ともに亡命をテーマとしていることは、『ユリシーズ』や『フィネガンズ』への寄与とともに、この地がダブリンに劣らず大きな役割を彼の創作のうえに果たしたことをうかがわせる。そしてその役割のなかではトリエステのコスモポリタンの性格、わけてもこの地の知的社会の中心だったユダヤ人の存在が圧倒的であつた。

ユダヤ人が存在感を発揮できたこと自体がトリエステの自由な空気——ここが彼らにとってトランクウィッロであつたこと——の所産であつた。オーストリアは反ユダヤの気風がつよく、ウィーンも例外ではなかつた。ウィーン大学の医学生として、ジョイスの一九年前（一八七六年）にトリエステの付属海洋研究所に滞在した精神分析の父フロイトもやはりユダヤ人であつたが、この地の魅力に惹かれ、イタリヤ好きになる。かつて父が受けた恥辱を引きずっていた彼にとって反ユダヤの気分の希薄さは居心地のよさを保障してくれた。

ヴァンケルマンの死

さて私の旅に戻ろう。

翌朝ホテルを出て街の背後の丘に向った。ここには古い大聖堂の跡に一部ロマネスクの遺構をもつサン・ジュスト教会が立っていて、そこを中心に旧市街の斜面が広がっている。教会の隣に市立歴史・美術博物館および石碑庭園があり、あまり期待しないのでぞいてみた。一九二八年というヨーロッパ的標準からすれば新しい施設だということもあって、多くを望まなかったのだが、回っているうちに庭に小さな神殿様の建造物を見つけ、だれかを祀っているようなので碑文を読むと電流が走るようなショックをおぼえた。ヨハン・ヨアヒム・ヴァンケルマン（一七七一—一七六八）である。ああ、彼はここで死んだのだと記憶がよみがえる。

ヴァンケルマンは一八世紀ドイツの美学者である。美術史学、考古学の近代的基礎を築き、新古典主義の思潮、とくにギリシャ復活のパイオニアとして大きな影響を与えた。「高貴な単純と静かな偉大」というギリシャ的美をすべての美の基準にしたことで知られる。一世代遅れて生まれたゲーテは、彼を知った後では「まったくあたらしい人間になる」と彼の功業を讃えている。

プロイセンの靴直しの息子に生まれた苦学の人で、次々と貴族の家庭教師や司書を勤めその間に古典の文学、美術の知識と実物を学び、やがてルーテル派ではしかるべき職を得られないところからカトリックに改宗、アルバーニ枢機卿（教皇クレメンス十二世の甥で、ローマ最

大の美術コレクター）と親しくなり、ついにはヴァチカンの古美術担当長官にまで登りつめる。この地位はローマ領内の古美術品の発掘と国外持ち出しに関する裁量権を委ねられているという途方もないもので、アルバーニの収集はさらにゆたかになる。全ヨーロッパの人文的知識人が彼の著作を読み、話題にした。

フリードリッヒ大王は彼を雇い入れようとして教皇との間で争奪戦を演じ、教皇は給与を増額して引止めをはかった。死の年である一七

写真掲載不許可

サン・ジュスト教会

六八年にはフリードリッヒとオーストリアのマリア・テレジアから招かれ、ウィーンを訪れたのち、ベルリンをキャンセルしてローマへの帰途につく。

トリエステではアンコーナへの船待ちに一週間滞在したあと、ホテルの自室で隣室に泊まっていた前科のある失業イタリア人コックに金品をねらわれて刺殺された。享年五〇歳。友人がサン・ジュスト教会の構内に墓を建てたというのが、これなのだろう。

というのがヴァインケルマンとその死についてのあらましである。私は大学一年のとき井島勉教授の美学の講義を盗聴して彼のことを知り、興味をそそられて先生の旧著『ヴァインケルマン』（一九三六）を読んだのだが、彼の死のくだりは右の記述を詳しくしたにすぎず、そのまま忘れていた。

ところが、この旅のすこしまえ、フランスのゴンクール賞作家ドミニク・フェルナンデスの歴史ミステリー『シニョール・ジョヴァンニ』（一九八四、田部武光訳）を手にして、謎に包まれた彼の死の真相がようやく明らかになる。名声隠れもないヴァインケルマンがなぜ実名を名乗らず「シニョール・ジョヴァンニ」の名で宿泊したのか？なぜ彼のような富裕な高位の人と刑務所から出たばかりの窃盗犯が同じホテルに隣り合わせて泊まることができたのか？何かの事情で安宿に泊まったのか？アンコーナ行きのような主要航路の船待ちになぜ一週間もかかったのか？フェルナンデスは公判記録を読み込んで次々に浮かんでくる疑問を取り上げては、仔細に吟味する。

じつは事件当時からヴァインケルマンは同性愛者で、親しくなった相手方に殺されたのだという噂が流れていた。彼には教え子と四年間同居していた「友愛」（井島）の前歴があり、こころも自分は夕食を取る習慣がないのに毎夕隣室を訪れて犯人と卓をともしする（犯人だけが食事を取る）といった奇怪な行動があったからである。フェルナンデスは同性愛説を明快地裏付けてみせたうえで、さらに同性愛説の難点とされた点——かつての愛人は知的にもすぐれた美少年であったのに犯人はあばた面の醜悪な中年男で知性のかけらもない人物だった——についても立ち入った答えを出す。

しかし、そういったすべてを私は忘れていた。惨劇の舞台は想像していた安宿ではなく、王侯貴紳の定宿であるオステリア・グランデで、それは私の宿泊したドゥーキ・ダオスタと同じホテルであること、帰国後フェルナンデスを読み返して知る。ホテルの建物は一八四七年に解体、再建されているが場所は同じで、犯人アルカンジェロはホテル前の広場で車責め四つ裂きの刑に処されたのであった。

歴史のなかの「トランクイッロ」

思い返せば、トリエステが「トランクイッロ」であるかないかに、私があればどこだったのは、もしかしたらこの事件が頭のどこかに潜在意識として引っかかっていたからかもしれない。そういえばジョイスも『ユリシーズ』のなかで登場する水夫にトリエステを「暴力の

「街」と呼ばせている。ジョイス一家はトリエステでの暮らしに楽しい思い出をもっていたようだから、やや意外な気がしなくてもない。彼はここに到着したその日に酔っ払った三人のイギリス人船員と警官の争いに巻き込まれて留置場に放り込まれた。そんな記憶がどこかに残っていたのかもしれない。

フロイトにとってもここは反ユダヤ的空氣の希薄な、やすらぎの地であるだけではなかった。

彼はさきに見たように若い日をトリエステですごし、イタリアへのあこがれをつよめた。なにより精神分析理論の形成にはイタリア行きが必要だったと自分でも語っている。だのに以後二〇年間イタリア行きをあえてせず、さらにその六年後の一九〇一年までローマを避けつづけた。ローマはいちばんあこがれていた地であり、同時にいちばんおそれていた地でもあった。そこはヴァチカンを中心にユダヤ人迫害の歴史的拠点であつて、かれにとっては禁止された愛の象徴でもあつたからだ。二〇世紀のあたらしい科学である精神分析にとつても、それは敵対的な空氣に包まれた、まさにトランクイッロならぬ地なのであつた。

そこで話はいささか入り組んでくるのだが、若きフロイトはヴィンケルマンを愛読し、崇拜していた。とりわけ彼が美術史学と考古学の生みの親となつたことを賛嘆していた。そのヴィンケルマンがトリエステで非業の死をとげ、ローマに帰り着けなかつた。それがフロイトのローマへの二律背反的な想いを生む一つの要因となつたと、岡田温

司は近著『フロイトのイタリア』で述べている。フロイトが好きなローマに行けなくなつたのはヴィンケルマンの死のせいだと言えるほどに、フロイトはヴィンケルマンに自己同一化していたらしい。トリエステはユダヤ人フロイトにとつてやすらぎの街のはずであつたのに、そこは反ユダヤとはちがつた意味でトランクイッロでない街だつたのだ。

それにしてもフロイトは少なくとも四回のトリエステ訪問でヴィンケルマンの墓参りをしたのであるうか。詣でたとしたら、墓前で何を想つたであろうか。ローマに行けない自分を何とかしてくれとでもつぶやいたのであるうか。岡田の卓抜な仕事を読んでも、その辺のことを知ることはできない。

写真提供…イタリア政府観光局（ENIT）

